

ふるさと
の 139
誇り



博しレポート

春の扉をひらく

もう一つの新年と節分

「鬼は外、福は内」。二月三日の節分の日、市内の各家や保育所、社寺などでは、鬼を払い、福を呼ぶ豆まきが行なわれています。節分とは二十四節気のうち四季の変わり目となる立春、立夏、立秋、立冬の前日を指します。中でも立春が新しい年の始まりと考えられたことから、その前日がことさらに節分と呼ばれるようになったのです。かつて市内で行なわれていた節分の風景は、今と少し違ったものでした。落合で今でも伝統的な豆まきを行なっている塩澤さんのお話と残された記録から、昔の様子をのぞいてみましょう。

節分で使う豆や米などの五穀には、穀霊が宿り、邪気を払う力があると信じられていました。その中でも特に大豆は、市内で出土した縄文土器にもその痕跡が見られるように、五千年以上もの長きにわたって人とともに歩んだ歴史をもちます。この大豆をまず、ほうろくなどで念入りに煎ります。これは豆で鬼を射る（煎る）ため、煎った豆でないと「鬼の世」が来るともいわれます。

次にイワシの頭と尾を焼きます。イワシを焼く臭いと煙が部屋いっぱい広がりますが、これも鬼を遠ざけるためのものです。焼く時には「スズメの口焼き チュウチュウ、カラスの口焼き カアカア、トンビの口焼き ピーピー」と唱えながらイワシにツバをかけました。これは農作物を食い荒らす鳥や虫を封じのおまじないで、悪さできないように口を焼いてしまおうぞ、というものです。それだけ鳥害や虫害は農業を生活の基盤とする人々にとって深刻な問題だったのでしょう。焼いたイワシはヒイラギやバリバリの木（モミヤツガ）などの葉先が尖った枝につけて玄関に飾りました。尖った葉先が鬼の目を刺し、邪気除けになると考えられたからです。これは「ヤキカガシ（焼き嗅がし）」と呼ばれました。

庭先には、竿の先に目籠か手すくい（うどんすくい）とバリバリの木をつけて軒先よりも高く掲げました。これは「鬼の目」と呼ばれました。準備が整うと豆まきの始まりです。煎った豆はまず神棚にお供えしてから各部屋にまきます。まく順序はその年の恵方や南東からなど家庭や地域によってさ



塩澤家の「鬼の目」

バリバリの木

玄関に魔除けとして、てすくいを飾る地域もあります（大曾利）

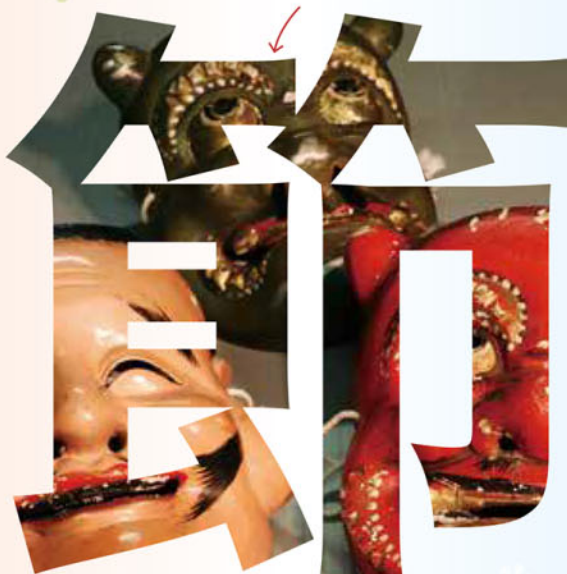


玄関に飾られたヤキカガシ（杓沢）

昔は煎る前に12粒とっておいて、月毎に火鉢で焼いて、月の天気を占いました。汗をかけたお雨、ふきだせば風、乾けばひでり



落合 塩澤家での豆まき



若宮八幡神社の福の神と鬼の面



鏡中條の巨摩八幡宮でも毎年豆まきが行なわれます



豆を必死にまく子どもたち



若宮八幡神社の鬼やらい（古市場）

まぎまでですが、塩澤さんはお父さまから「富士山の方角に手いっぱい豆をにぎって投げる」と教わったそうです。屋内の豆まきが終わったら外に出ます。いよいよ最後の仕上げです。「鬼のまなこをぶつぶせ」と叫びながら「鬼の目」に向かって豆を投げつけました。夕暮れ時の薄闇の中、隣近所からも同じ掛け声が響きます。負けないように声を張って競い合い、それはにぎやかだったそうです。

古市場の若宮八幡神社では、昭和二十五年から敬神会の会員が福の神と鬼になり古市場と荊沢の各家や公共施設などめぐる「鬼やらい」が行なわれています。鬼をみて泣き出す子もいれば、怯えながらも豆をぶつけて追い払う子もいます。ひとしきりの攻防の中で現れる福の神は、新しい年の幸福をもたらします。

こうした節分の行事は「お歳とり」とも呼ばれました。立春は新しい年の始まりと考えられたからです。こうした節目の日には神霊が訪れると古くから信じられてきました。庭に掲げられた鬼の目も本来は神霊が宿るための依代だったのではないか、という意見もあります。つまり鬼とは災いをもたらす邪悪な存在であるばかりではなかったのかもしれない。南アルプス市域はユネスコのエコパークに登録され、自然と人が調和し、ともに生きることを目指しています。節分は人々が自然の猛威と戦いながらも、敬い、その恵みに感謝し、新たな春に幸福を祈る祭りです。こうした伝統文化には今後自然と向き合っていくための知恵や記憶が秘められているのです。